

書評

高橋良輔・大庭弘継編著

『国際政治のモラル・アポリア—戦争/平和と揺らぐ倫理』

(ナカニシヤ出版、2014年)

奥田太郎

本書は、中堅・若手の著者を中心に編まれた、新たな視座からの国際政治に関する研究書である。編者の一人である高橋良輔の言葉を引けば、本書が目指すのは、「規範的に国際政治を構想すること」であり、その読者層として想定されているのは、政策決定者から市民に至るまで、およそありとあらゆる政治的判断の担い手である（15頁）。本書の中で著者たちは、国際政治が直面する道義的難問を「モラル・アポリア」と称し、国際政治の典型的なトピック、すなわち、人道的介入、対テロ戦争、核兵器、防衛戦争、平和構築、民主化、国家主権、人権をすべてその観点から撫で斬りにしようと果敢に試みている。本書の著者の多くが、国際関係論などの国際政治系の研究者でありながらも、国際政治の諸問題を敢えて「道義」というフレームワークで捉え、その問題系を新たに組み替えようと七転八倒している点、および議論の射程をありとあらゆる政治的判断の担い手にまで引き延ばそうとしている点で、本書は、国際政治を主題とした哲学の試みであると言っても過言ではあるまい。本書の試みの成否とは独立に、こうした果敢な挑戦が一冊の本として世に問われたことそれ自体を、評者は歓迎したいと思う。

では、肝心の本書の試みの成否はどうか。評者は、本書の試みは残念ながら成功していない、と判定する。この判定の理由を以下に示そう。まず、各章についてコメントを付し、最後に全体について論ずる。

「第1部 戦争のアポリア」は、大きく分けると、比較的新しいタイプの戦争（人道的介入（第1章）、対テロ戦争（第2章））と典型的な戦争（核兵器（第3章）、防衛戦争（第4章））について論じられている。

比較的新しいタイプの戦争である人道的介入と

対テロ戦争に対する本書のアプローチは次の点で一貫している。すなわち、一度一線を越えてしまうと、後は泥沼しかないという事態について、一線を越える前の事情については議論上完全に度外視して、一線を越えてしまった後のみ議論の射程を限定したうえで論じている、ということである。言い換えれば、人道的介入や対テロ戦争しか選択肢がないという限定的な状況の中で不可避的に発生しうるアポリアが、第1章と第2章で扱われているものである。

この二つの章を比べてみると、対テロ戦争を論じた第2章にはほとんど引っかけりを覚える点はなかった。それはおそらく、対テロ戦争の場合、道義性はあくまでも戦争遂行上の手段にすぎず、ことさら道義性を持ち出さずとも、基本的には徹頭徹尾政治的な振る舞いとして政治学的に記述可能であるため、戦争において相手を打ち負かすための道程に現れるアポリアだけを問題にすることができるからである。しかし、それは厳密に言えば「モラル・アポリア」ではない。

他方、人道的介入を論じた第1章には、若干の引っかけりを覚える。それは、人道目的での介入の手段が人道に背く武力であり、武力行使による帰結はほぼすべての場合において人道に背くものにならざるをえないが、武力を行使しないこともまた人道に背くことである、という真性の「モラル・アポリア」を抱える問題だからであろう。倫理学を専門とする評者の目からすれば、この真性の「モラル・アポリア」を扱う手つきとしては、第1章の論述はいささか粗雑に見える。

たとえば、第1章では、人道的介入のパラドクスを構成する系として、「民間人を救うために民間人を犠牲にする」パラドクス（55頁）が論じられているが、この中で語られる前者の「民間人」と後者の「民間人」は果して同じものを指示しているのか。確かに二つの「民間人」は、軍人、文官などとの分類上の区別においては同じであろうが、「救う」というフェイズで言及される「民間人」と、「犠牲になる」というフェイズで言及される「民間人」は、本当に同じものを指示しているのだろうか。少なくとも、「民間人を救うために民間人を犠牲にする」がパラドクスであるかどうか、

論述上この点にかかっている以上、実際の戦場ではみんな同じだ、といった井勘定は避けるべきであろう。「タロウを救うためにタロウを犠牲にする」と同じ意味でパラドクスと言えるのかどうか。その分析を詳細に進めていくことこそが、政治学の果すべき役割の一つであろう。

また、人道的介入のパラドクスのもう一つの系である「人権保障という普遍的な規範を実践するために、特定の国家の政治的意図に頼る」というパラドクス（55頁）は、上記第一のものと同じレベルでパラドクスと呼べるだろうか。人権保障の実践の中に特定国家の政治的意図が混入することで、原理上、人権保障の実践そのものの正当性が掘り崩されることはない。すなわち、特定の実践の一般的内容（人権保障）がもつ正当性は、特定の実践のその都度の政治的意図によって覆ったりはしない。仮にそうした政治的意図によって覆るものがあるとすれば、それは特定の実践それ自体の個別的な正当性であって、それは、端的に、その実践が当該の一般的内容をもともと備えていなかったというだけである。それはせいぜい個々の実践の拙さが露呈したというだけで、そこに原理的なパラドクスなど存在していない。それよりむしろ、そこで問われ分析されるべきは、人権保障の実践に特定国家の政治的意図が混入するのを忌避する、国際社会におけるある種の規範そのものであろう。

これら二つのパラドクスを論じる際には、たとえば、テクニカルタームとして、人道とは無関係なものを意味する「非-人道性」と、人道に背くものを意味する「反-人道性」を区別してみるというのが有益かもしれない。その場合、政治的意図の大半は、非-人道的であるかもしれないが、そのすべてが反-人道的とは言えないだろう。他方、武力介入の付随被害はすべて反-人道的であるが、軍事行動という透徹した眼差しで捉えれば、非-人道的でもあろう。いずれにせよ、本書の著者たちが立ち向かうべき課題は、「パラドクス」といった安易な表現で整理してしまうことを禁欲し、複雑で解き難い現実を粘り強く丁寧に描き出したうえで、そこに理屈の筋道をおそろおそろ示す、爆弾解除にも似た慎重な手つきをこそ求める

ものであろう。真性の「モラル・アポリア」を扱っている第1章において、そうした慎重な議論に出会うことができなかつたのは極めて遺憾である。

典型的な戦争を論じた第3章と第4章は、対象とする事柄（核兵器および防衛戦争）が有する構造的な行き詰まりを論理的に解明しようとしている点で、探究のアプローチに類似性があるように思われる。しかし、これら二つの章において浮き彫りにされるアポリアは、核兵器という究極的な兵器の存在や、自国を守るために自国民を死地に追いやる防衛戦争といった事柄に固有の構造的なアポリアなのであって、そこに道義上の難問、すなわち、「モラル・アポリア」は必ずしも存在しない。実際、第4章において、著者が「人々を保護しない国家が、その「生存」のために人々に犠牲を強いる場合、その国家のために死ぬ道徳的義務はない」という自身の倫理的な立場を掲げているように、むしろ、そこから倫理的思考を開始するための基本的な問題構造が語られているにすぎない。

「第Ⅱ部 平和のアポリア」では、大きく分けて二つのテーマが扱われている。すなわち、平和構築（第5章）と民主化（第6章）という紛争前後の国際政治的な活動に関する部分と、国家主権（第7章）と人権（第8章）という国際政治を貫く理念に関する部分である。

紛争前後の国際政治的な活動を論じた二つの章では、その種の活動の困難を明晰に論じ切っており、新たな秩序づくりに不可避的に伴われる現実のままならなさや存分に伝える内容となっている。しかし、残念なのは、どちらの章においても、本書のキーワードである「アポリア」という語が登場する部分に限って、その論述の切れ味が悪くなっているということである。たとえば、平和構築を論ずる第5章冒頭では、「平和構築の関係者はいかなる平和が望ましいかについて合意できない」ということ、および、「国際アクター主導の平和構築はローカル・アクターが求める平和を実現できない」ということ、その帰結として、「国際アクターは口出しをやめられないが、自らの考える平和を押し付けて「出口」を求める」という

こと、これらはすべて「アポリア」であると述べられる(172頁)。しかし、興味深いことに、これに関わる詳細が論じられた第5章本編では、ほとんど「アポリア」という語句は登場せず、それが用いられている箇所も強引に追加しているという感が否めない。これらは本当に「アポリア」とわざわざ称すべき事態なのだろうか。現実のままならなさストレートに伝えれば、それが一種のアポリアであることは十分読者に伝わるはずだが、あたかもそれだけが特別な何かであるかのように「アポリア」ラベルを貼付けられてしまうことで、かえって伝えるべきままならなさが縮減させられてしまっているように思われる。なお、「モラル・アポリア」という語が使われる箇所(182、186、192頁等)では、実のところ、何ら道義的難問は語られていない。

また、民主化を論じた第6章もまた、第5章と同様の特徴を有している。たとえば、第6章で、「グローバル化により国家のデモクラシーが限界を迎えつつあるが、それを打開するコスモポリタン・デモクラシーの実現には国家のデモクラシーが必要というパラドクスである」(223頁)と述べられているが、これは、果してパラドクスと呼ぶのだろうか。たとえ国家デモクラシーの限界の乗り越えが当の国家デモクラシーの強化を要求するとしても、コスモポリタン・デモクラシーが、国家デモクラシーの延長線上に生じうるものだと考えれば、そこには何も「パラドクス」はないように思われる。それはむしろ、国家デモクラシーの自己超克運動として一貫性のある事態と捉えることもできるだろう。評者がここで指摘したいのは、民主化支援の問題点を淡々と語り出すに留めることで読者自身にアポリアの所在を微かに感じさせるというアプローチをとらず、「これはパラドクスである」と断じてしまうことで、本来検討されるべき課題(たとえば、コスモポリタン・デモクラシーと国家デモクラシーの概念的・理論的結びつきの可能性の検討等)を置き去りにしてしまっている、という決定的な瑕疵である。

国家主権を論じた第7章は、他の章に比べて、本書が「アポリア」と称して示そうとしている事態を概念的にうまくすくいあげているように思わ

れる。それを象徴するのは、「動的平衡」や「星座」といった語が用いられていることである。ただし、「動的平衡」や「星座」の比喩によって表わさるような事態を「アポリア」と呼びうるかは疑問である。たとえば、「国家の自律性を示す対外的独立性が実は決して自己実現できず、むしろ他律的な承認のなかに埋め込まれているという事態こそ、国家主権をめぐる最大のアポリア……である」(272頁)と述べられているが、ここで「アポリア」という語を用いるのはおそらく相応しくない。それは、人は親なしでは存在できない、ということそのものが何のアポリアでもないのと同じことである。アポリアを生じさせるのは、あくまでも「問い」である。たとえば、鶏と卵の生成関係の構造は、それ自体としては何のアポリアでもないが、「どちらが一番先に生じたのか」という問いを立てた時に初めてアポリアを構成するものとなる。その際に重要なのは、アポリアを生じさせた問いそのものが、まともな問いかどうか、ということである。本来、本書が「アポリア」を論ずる研究書であるのならば、この「問い」をこそ掘り起こし、それを批判的に検討すべきであったろう。そうした問いが垣間見える論述は、残念ながら、第7章を含め、本書全体を通じてほとんど見当たらない。

人権を論じた第8章では、事実についての著者の憶断を含む理解がそのまま述べられている箇所が多く、その主張を俄には受け容れ難い。たとえば、「倫理の自壊」を説く箇所では、「倫理的なものと倫理的でないものという区分け」をするのは「最後は「力」だと答えざるをえなくなる」と語られる(316頁)。それはそれで一つの主張として理解はできる。しかし、こうした倫理についての一つの見解をもって、倫理全般の「自壊」を説くのは、あまりに拙速に過ぎるであろう。また、倫理的なものと倫理的でないものの区分けが究極的には力に由来する、という著者が支持する見解が「倫理の矛盾」を示すものだと語られる場合、それを「矛盾」だと考えるのはなぜなのだろうか。現実に通用している「倫理」が成立するその始点に剥き出しの「力」がある、という系譜学的な説明は、「倫理」の内実そのものを必ずしも揺さぶ

るわけではない。むしろ、そうした系譜学的な説明を用いてまでその存在の正当性を問う必要がないがゆえにそれは「倫理」と呼ばれうる、という見解すら成立可能である。この説明の層の違いを無視して安易に「矛盾」だと述べることができるのは、著者自身が、力に基づくものは「倫理的ではない」という特定の倫理的前提を置いた道徳的主張を倫理の生成というアモラルな場面にまで遡及させてしまっているからであろう。著者に対して好意的に解釈するならば、第8章で述べられていることは、人権、権利、倫理などに基づいてつくられてきた社会制度の「自壊」ではあっても、人権、権利、倫理そのものの「自壊」ではない。奇妙に徹底された（著者自身だけがおそらく無自覚な）著者の倫理的態度によって、それら二つの「自壊」の層の違いが区別されないまま本章の論述が進められてしまっている。

次に、本書全体を締めくくる「終章」について、倫理という観点から、看過すべからざる箇所があるので論及しておこう。著者は次のように断ずる。

悪が避けられないとすれば、それが必然だと示すことで、躊躇する時間を短縮させる。実践者たちは、数多くの現場で選択し決断しなくてはいけない。本書が目指したことの一つは、その孤独に理解を示すことであり、孤独に苦しむ決断者たちに、同じように苦しんだ過去の知己を紹介することである。決断者の苦しみを誰も肩代わりすることはできないのだから。(339頁)

ここに大きな疑義を呈したい。「躊躇する時間を短縮させる」ことは、果して倫理的に望ましいことなのだろうか。確かに、実務的な効率性追求の観点からすれば望ましいだろう。しかし、倫理的にはどうか。ここで著者は図らずも、『1984』でオーウェルが描いたと自身が批判的に述べている状況(333頁)を称揚してしまっている。むしろ、多くの悲劇と不確実性に満ちた世界の中で私たち人間にとって重要なことは、きちんと躊躇することではないのか。こうした視点が欠落していることは、結局のところ「決断者」の立場からしか語

られていない、ということを含意する。そうした数多くの決断の帰結をまともに被った人々もまた、モラル・アポリアに直面する重要な実践者たちであるとも思われるが、そうした者たちの視線は、ここではいっこうに見えてこない。この終章が本書を総括しているのだとすれば、本書の名宛人は一体誰なのか。紛争によって傷ついた者たちに対して、本書は、何を伝えることができるのか。冒頭に述べたように、そうした人々も広く本書の射程に入っているはずではなかったか。だとすれば、本書がそうした人々に対して発するメッセージは、「あなたたちを傷つける決断をした「実践者」の苦しみは誰も肩代わりできず孤独なのだから、そういうものだと思って諦めて下さい」ということになりはしないか。さらに言えば、この終章の記述は、「決断をしない」という選択肢を残そうとしていない。しかし、時に「決断をしない」という選択をとることだけが、かろうじて倫理的であるような場面もある。おそらく本書の路線で考えれば、「決断をしないこともまた決断だ」ということになるのであろうが、その思考はあまりにもナイーブではないか。決断できぬまま留まることと、決断しないことを決断することとは、倫理の次元では別のことである。そのように意思決定を無限に決断へと回収していく決断主義の指向が、歴史上様々な悲劇的帰結を招来してきたことは言を俟たないはずである。

この点に関連して、第4章補論の「特攻のアイロニー」と題された節での記述にも共通する危うさを覚える。著者はここで、「特攻に代表されるように国家は人々を守らなかつたかもしれないが、その悲劇によって新しい日本を生み出したのである」(166頁)と述べるが、この「悲劇であったがゆえに国家が再生するアイロニー」(167頁)は果して妥当な現実の把握なのだろうか。著者の、敢えて書く、という前のめりの姿勢そのものを全面否定したいとは思わないが、この補論が、学術書の主要な一部分をなすものとして書かれているのであれば、著者自身の置く暗黙の前提についてもう少し自覚的に慎重に筆を運ぶべきであったと思われる。確かに、大きな悲劇は、結果として人々を再生させる一因になりうるだろう。

しかしそれは、生じてしまった悲劇に対して向き合わざるをえない中での結果であって、安易に「アイロニー」として一般化され難い徹頭徹尾個別的なものであろう。「歴史が繰り返される」ことは、歴史的事象の個別性を消去するものではない。むしろ、原理上個別的な歴史の中に一般性や規則性をみだそうとする知的営みにこそ、細心の注意が払われねばならない。個別の事柄を徹底的に個別の次元で語る知的体力と覚悟がないのであれば、研究者は「悲劇」について語るべきではない。個別の次元で語られるべき悲劇を一般化することは、逆向きの思考、すなわち、人々の再生のために悲劇をもたらすことは正しい、という倫理的倒錯を必然的にもたらすだろう。実際、特攻の「生みの親」である大西はそのような筋目で思考していたと思われるが、著者はその思考を無防備になぞっているように思われる。こうした思考に陥りがちであること自体もまた、私たちの「モラル・アポリア」であるはずだが、その視座はこの補論からは窺い知れない。第4章補論前半で唱道された「理念と実践と結果の相互関係」の詳細な把握という探究の姿勢は、早くも、この補論後半での記述それ自体において裏切られている。

最後に、本書全体について述べよう。話の筋を見えやすくするために、本書が取り扱っていると思われる事柄を、それに類似すると思しき別のケースに言及することで述べ直してみよう。地域内随一の武闘派不良たちが集う高校があるとす。その高校では、日々、派閥に分かれた不良たちの抗争が絶えなかった。そこに、屈強な生徒指導の教員数名が着任し、一般生徒に対する付随被害をもたらしつつも、不良たちの抗争にひとまずの終止符を打った。それ以降、その高校では直接的な暴力による事件は激減したが、それとともに、今度は学級内における陰湿ないじめが横行し始めた。さて、この事態をもって、生徒指導のアポリアと呼ぶことは適切であろうか。少なくとも、そこにあるのは、一定の傾向をもつ生徒の集団を指導することの困難な事実ではあろうが、それは「アポリア」と呼ぶに値する何かではないだろう。ましてやそれは、「モラル・アポリア」などでは

ない。

私たちは、比較的身近で、規模のそれほど大きくないこうしたケースについては、事柄の筋目を適切に把握することができる。他方で、国際社会の戦争・紛争の問題といった、規模も大きく、事柄の性質上個々人の感覚では捉えにくい問題群（そもそも問題をどのようにフレーミングするかが決定的であるにもかかわらず実に不確かな問題群）については、把握の精度が必然的に低くなる。だからこそ、まずもって、その精度の向上を、研究を通じて進めるのではないのか。そうした仕事

が本書を通じて十分になされているだろうか。残念ながら、答えは否である。本書を通読しての感想を一言で述べるなら、「アポリア」のインフレである。半ば意図的にインフレさせているのだから、当然ながら、本書の言の通り、世界は「アポリアに満ちている」(163頁)ことになる。解決困難な事態をすべて「アポリア」というメガネで見よう、という提言が本書に満ちている。この手のインフレのもたらす帰結として最も危惧されるのは、“あれもこれもアポリア→単純思考→実質上の思考停止”という複雑さの単純化による思考の不活性である。本書全体から窺い知れるように、これはもとより本書の著者たちが望んだことではあるまい。しかしながら、結果的に、そうした著者たちの意図を自分自身が裏切る結果を招いてしまっているのではないか。すでに述べたように、本書の取り扱ったテーマの中で、真性の「モラル・アポリア」として捉えうるのは、人道的介入のみである。その他のテーマには、もちろん独自のアポリアが存在しているが、それらは、「ほら、ここにもアポリアがありますよ」と昆虫採集的に提示されて知られるものではない。それぞれのアポリアは、それぞれのアポリア性を死活的に有するのであって、それらを十把一絡げにしてしまうのは、端的に学知の暴力に他なるまい。

確かに、学知の語り口は、どのように抗おうとも、一種の暴力性を帯びた一般化を伴う。そこに開き直って本書は綴られたと見ることもできるのかもしれない。あるいは、個別に掘り下げられるべき事態が「問題」として学知のフィルターを通してすくいあげられる時に不可避免的に暴力的一般

化が伴われてしまう、というグロテスクさを体現することで、本書の存在それ自体が、皮肉にも学知のアポリアを遂行的にあぶり出しているのかもしれない。本書の語彙を借りれば、『『国際政治のモラル・アポリア』のアイロニー』とでも表現できようか。

もう一点指摘しておこう。著者たちが示す不確実性や「揺らぎ」への過剰なこだわりによって、本書を貫く暗黙の前提が逆説的に露呈しているように思われる。その前提とはすなわち、この世界には揺るぎのない確固たる確実な何かは存在している（そうでなければならぬはずだ）、という純粹主義の信念である。そうした信念が著者たちの現実認識を枠付けしているがゆえに、ままたらぬ現実のありようの、そのままならぬさそれ自体に耐えきれず、そこに過剰に反応してしまっているように読者には見えてしまう。いわば、大人になりかけの思春期に、大人たちの世界の汚さに対して絶望し、時に「盗んだバイクで走り出す」ような、反抗期のメンタリティに喩えられよう。その意味で、本書は、国際政治学における反抗期本として、特筆すべき位置づけを確保している。国際政治における様々なトピックとそれを取り扱う学術的知見を「バイク」に喩えれば、まさに、本書は、「盗んだバイクで走り出す/行き先も解らぬまま/暗い夜の帳の中へ」(尾崎豊「15の夜」)という詩で歌われたことの国際政治学バージョンと言ってよいかもしれない。言うまでもなく、反抗期本にしか示しえないことがある。評者はそのこと自体は積極的に評価したいと考えている。

以上、かなり痛烈な批判を試みたが、これもひとえに、本書の著者たちが本書を通じて果敢に攻めに出てきたからこそ可能になったことである。また、評者としては、本書の弱点は、「モラル・アポリア」というキーワードにこだわり過ぎた点にこそあれ、個々の著者による個々の論述には、基本的にそれほど大きな弱点はなく、学ぶべきところも多いと考えている（もちろん、本書評で言及した批判点は除く）。章構成の巧みさ、コラムの充実ぶりを見れば、本書が攻めの姿勢に満ちた、よく練られた研究書であることは明らかである。しかしながら、攻めるは易く守るは難し。本書評

に限らず、様々な場所で本書が多くの議論を喚起することを願う。

かつて評者の著書（これもある意味での反抗期本である）に対して骨身に沁みる書評を執筆してくれた本書編者の一人・大庭弘継を筆頭に、本書の著者たちに対して、最大限の敬意を表してこの書評を贈りたい。